
物語設定資料販売店

フィーカス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物語設定資料販売店

【Zマーク】

Z2278R

【作者名】

フィーカス

【あらすじ】

小説や漫画、ドラマなどの物語を描く際に、作家を悩ませることのひとつが、物語の「設定」。そんな物語の設定そのものを売っている店が存在するとしたら……

いつも、何もかもうまくいかなかつた
貧しい家に生まれ、しばらくして両親は両方ともいなくなつてしまつた。

家も失い、財産もわずかしか残らず、明日の生活も見えない状態。スラム街で暮らし始めてもう10年、奪い奪われ、殺し殺されそうになる毎日。

もう、希望なんて無い。いつそのこと、このスラム街で死んでしまおうか。

少年がそう思つて塞ぎこんでいたとき、彼女は田の前に現れた。同じ年くらいの、黒い髪と黒い瞳、そして黒と白のコントラストが不思議な印象を持たせる衣装の少女。

「君は……誰？」

少年は、突如現れた少女に問いかける。

「私？私は、あなたたちが言うところの『魔女』」

ここから、少年と魔女の少女の物語は始まつた

「という物語なのでふ」

ややぼつちやつとした、ワンピースに白い前掛けをした店員カルチエは、「魔女と少年の物語」と書かれた、手元にある設定資料集を元に、やつてきた客の男性に説明を行つた。

広々としたこの空間は、木で出来たテーブルの上に出されたコーヒーの香りで満たされている。スーツ姿の客の男性は、そのコーヒーハイに口をつけながら説明を聞いていた。

「確かに、ファンタジーとしてはなかなか面白そうだね。『魔女がいるから不幸になる』のではなく、『不幸があるから魔女がやってくる』という設定も面白いね」

「そのほかにも、キャラクターの設定や時代の設定、そのよつなこ

とになつたいきさつ、その結末などの設定も各種取り揃えているのでふ。全50ページ、これで1冊分くらいはかけると思うのでふが、どういたしまふか?」

客の男性は、「コーヒー カップをコースターに置くと、静かに考え始めた。

「……そうだな……締め切りまであまり時間もないし……。そのネタ、購入するとしよ!」

「まいどあり、でふ」

カルチエは手元の資料を片付けると、奥から別の書類を持つてきた。

「こちらが購入契約内容と、契約書でふ。よく読んで、こちらにサインしていただきたいのでふ」

カルチエが書類を渡すと、客の男性はその書類に目を通した。しばらくして、胸元のボールペンで契約書にサインを行った。「はい、これで契約は完了でふ。代金は、連載確定後に引き落としをさせていただくのでふ」

「助かつたよ、ちょうど小説のネタに困っていたからね」

男性は書類をかばんにしまい、店を後にした。

「あなたの幸せ買い取ります」

店の入口につるされた、青地に白い文字の看板の下に、やうじこんな看板がぶら下がっている。

「私の物語、あなたに売りります」

なんとも不思議な言い回しだ。

もともとこの店は、人の幸せを売り買いする「幸運販売代行店」というとんでもない店であるが、経営している店員の趣味が講じて、様々な副業を行っている。

そのうちのひとつが、「物語の設定を売る」というものである。世の中には様々な小説、漫画、ドラマ、アニメ、演劇などがある。すべてに共通することは、「物語がある」とことである。

その物語の中には、さらに様々な要素が含まれている。

たとえば物語の「コンセプト、登場人物の設定、時代の設定、場所、目的、結末……」

物語を構成する上で、これらは欠かせない設定であると同時に、物語の作者を悩ませるもの一つである。

小説一つ書くにしても、これらが決まらなければ、どんなに文章力があつても話が出来ない。

そんな、作家たちの悩みの一つを解消するのが、この店である。ここでは、物語のコンセプトから、そのコンセプトに合った登場人物や場所の設定などを、「設定資料集」の形で販売しているのだ。「物語設定資料販売店」といつたところか。

ちなみに先ほどの「悪魔と少年の物語」のあらすじはこんな感じである。

生きる希望を失つた少年の前に、謎の少女が現れた。

彼女は、人間が言うところの「悪魔」である。が、一般的なイメージである、「悪魔がいるから不幸になる」という存在ではなく、不幸から発せられる負のエネルギーを得るために悪魔がやってくる、というものだ。

彼女は「死」という究極の不幸がどのような味なのかを知るために、負のエネルギーを放出し続ける少年と共に行動をする

客の男性が帰つた後、カルチエは店の奥にある事務所に顔を出した。

「とりあえず、1つまた売れたでふ」

「フフ……また私の才能が一つ売れたってわけね」

不気味な笑いで事務所の机に座り、原稿となる紙を見つめる、背が高く、すらりとした体型の持ち主は、カルチエの姉、アティカである。

「幸運販売代行店」を行つてゐるときは主に姉のアティカが接客、妹のカルチエが経理担当なのだが、「物語設定資料販売店」のとき

はアティカが主に商品を作成しているため、カルチエが接客を行っている。

もともとアティカは物語の設定を考えるのが得意だつたらしく、小さい頃から様々な設定をノートに書き溜めていたのだ。

それをつい最近、幼馴染の男性に見せたところ、そのアイデアを元にした漫画が、なんと大ヒットしてしまったという。

そこでアティカは思った。「このネタを売つたら商売になるのは？」と。

それ以来、「幸運販売代行店」で接客を行ひながら、その間に思いついたネタを片つ端からノートにメモしていくのだ。

すると、何故かそれを見たカルチエが、翌々日くらいにパソコンで見事なまでの設定資料集として完成させているというのだ。

「あんた……これは売れるわよ！書店で販売しましょ！」

「何で書店なのでふか？しかもだれか一人使つてしまつたらもうそのネタは使えなくなつてしまふよ？」

何故か表紙まで普通の本のように加工されているその設定資料集は、恐らく書店に並んでいても不思議ではないくらいの完成度を誇つていた。

一体、どうやつて加工して一冊の本に仕上げたのかは不明である。こうして出来た設定資料集は、「幸運販売代行店」の傍ら、ひとつと販売されることになった。

最初に来た客は、全く卖れない漫画家であった。

「もう、次にいいネームがかけなければ、連載は諦めろつて言われているんだ！助けてくれ！」

そういわれて、ちょうど最初に出来た設定資料集の説明を行い、その漫画家に卖つたのが最初の売り上げである。

その設定を使った漫画は、もともと定評があつた画力もあり、現在では大人気の連載漫画となつてゐる。コミック第1巻が発売されたときには、その漫画家がコミックを持つて泣きながらお礼をしに

来たくらいである。

「あのときのタイトルは、確か『夢工場のお仕事』だつたでふか?」

「そうそう、当たり前のように見ている夢だけど、実は夢の世界でも政治をしたり、商売をしたり、工事をしたりしている人がいて、みんなが安心して夢を見ることができる、って設定だつたかしら。小学生の頃に作った設定だから、結構いい加減だつたのよね、あれ」

そのときの販売価格は、一万五千円。一つの設定で大ヒットを飛ばせ、好きな仕事が続けられる上に大きな収入が得られると考えると超破格の値段だ。

以来、何人かの小説家や漫画家がその設定資料集を買って行つたが、それらの設定を使つた小説や漫画はすべて、ベストセラーになつたり、長期連載されたりしている。

それらの作品は、すべて店頭の本棚においてあり、客も読むことが可能である。

しかし、大ヒットを飛ばせる凝つた設定が出来るのであれば、その設定を使って小説なり漫画なりを書いたほうが早いのでは?と思ふかもしない。

実際、アティカもその設定を使って自分で小説を書いたことがある。

……が、その小説の冒頭は以下のようなものだ。

【限定カラオケサバイバル】

今の世の中、様々な娯楽施設がはびこっている。その中でもカラオケという物は、暇人たちが暇をもてあますための道具として使用しているものだ。

そして、そのカラオケという名の世界を、とあるゲームに使用しようという悪の組織が現れていた。

時刻は12時。悪の組織の一人が呟いた。

「これから始まる……楽しいゲームが……」

カーテンを開け、そこから見下ろすと、舞台となるカラオケルームが見える。そう、ここが”ゲーム”的舞台なのだ。

「くつくつく……」これから楽しもうと思つているところ申し訳ないが……ゲームを開始させてもらおう

男はそういう残すと、自室のドアを開けた。窓から差し込む朝日が、ゲーム開始の合図を知らせる……

この冒頭文を読んだカルチエは、そこだけで頭を抱えてため息をついた。

「どう？ 私の力作は」

「どこから突っ込んでいいか分からぬでふ」

「そういわれて、アティカはすこしへこんだ。

「とりあえず、カラオケに行くのが暇人みたいな書き方になつてるのはどうかと思うのでふ。そして突然出てきた何のためかわからない組織。でもって、12時が深夜なのか昼間なんかも分からぬし、次のシーンでもう朝日が出てきてるしで時間軸もぐちゃぐちゃでふ」

などと、突っ込みどころを列挙した。

「な、ならばあんたが書きなさいよ！」

「フツ、私の文章力をなめてはいけないでふよ？」

そう言つと、カルチエは設定資料を持つて机に向かつた。
そして一時間後……

「できたでふ」

「どれどれ？」

アティカは、カルチエが書いた小説を読んでみた。

「……私と大して変わらないのでは……？」

「だから言つたでふ。私の文章力（のなさ）をなめてはいけないと要するに、二人とも文章力が壊滅的なのである。

設定はかなり凝つて神がかっているものの、それを文章にしようとすると、時間軸やら言い回しやらが意味不明なことになってしま

う。

「うーん、カラオケの選曲を、アーティストで限定させて、それで歌えなくなつたら抜けるつていう発想はよかつたのでふが、どうも文章にして話を進めるのは難しいでふね」

「まあね。選曲カードとか、実際作つたら面白そうなんだけどねえ……まあ、つまりは材料を料理する人次第つてことかしら」

ここでの設定はかなりの完成度を誇る。この設定を生かせるかどうかは、物語を描く作家自身の腕次第となる。いくら設定が凝つっていても、話を進める能力や語彙力が無ければ、その設定の面白さがなくなつてしまふ。

そのような能力は、いろんな文章を読むことで身についていくものだが、この姉妹にはそういうことに興味がないようだ。

チリンとドアのベルが鳴つた。客が来たようだ。

「いらっしゃいでふ。今日はどんなご用事でふか？」

チェックの上着にデニムといった、ラフな格好をした男性客だった。カルチエは、その男性客をテーブルに案内すると、コーヒーを淹れて差し出した。

「今度新しいホラー小説を書こうと思つてゐるんだが、何か良いものはないかなと」

「ホラーでふか……少々おまちください、でふ」

カルチエは、アティカがいる事務所のほうへ向かつた。

「お姉ちゃん、ホラーの設定つてあるでふか？」

「ホラー？うーん、だつたらこの前作つたこれはどう？」

アティカが1冊の設定資料集を取り出し、カルチエに手渡した。

「……”自傷悪魔”でふか。お姉ちゃんは悪魔が好きでふね」

「まあ、私自身が小悪魔だからね」

「……あんまりいい意味じやない氣がするでふが……。しかもこれつて、ファンタジーか何かじやないでふか？」

「こういう設定は、書く人によつてはホラーになりうるのよ。さあ、

さつをと持つて行きなさい」

あきれながら、カルチョは設定資料を持って接客室に向かった。

「……なんと言つか、ありきたりな設定な氣もするのだが……？」

「まあ、小説世界では、表現やネタがかぶることがよくあるでふ。ホラーともなると、つまりは怖いと思わせることが重要なのでふね」

”自傷悪魔”は、一応ホラーの設定で作つてある。

自分を傷つけたいという衝動は、ネガティブな思考が生み出す悪魔がやつていいことである、というような感じの話である。そこから、悪魔が実在化してしまい、自傷行為を行う人が増加してしまうといつ。

「ただ、そのあらすじを聞く限りではどうも先が読めてしまうのが……」

「詳細は、この資料集にあるのでふが、契約していただかないところ以上詳しく述べるわけにはいかないのでふ」

「そうかい、じゃあとりあえず今日は帰らせてもらおうか」

荷物をまとめ、男性客は扉を開ける。

チリン、といつ扉のベルの音が鳴り、すぐに男性客は姿を消した。

「ああ、またあの人か」

「そうでふね。どうやらネタだけを回収しに来ているみたいでふ」
設定資料集を買わずとも、あらすじだけは聞くことが出来る。もちろん、そうしなければ、どのような物語かが分からぬからだ。
しかし、「ならばあらすじだけ聞けばネタが回収できるのでは?」
と思う人も出てくるのだ。

実際そのような人を3人ほど見た。

……が、あらすじを聞いただけでは何故かきちんとしたストーリーが組み立てられないようなのだ。

簡単に言つと、家の絵を見ただけで、材料をそろえて自分で作ろうとしているような状態だ。

どのような物語が描かれるがある程度想像できるものの、きちんとした設定がうまく出来ず、話が進まなくなってしまう。

そもそも、物語の設定が出来る人ならば、わざわざこんなところに来たりしない。そういう人は、ネタにしても普段の出来事などから作り出すことが出来る人ることが多いからだ。

また、この設定資料集のネタを用いて何かを出版した場合、その出版社から連絡が入る仕組みとなつていて。基本的に設定資料集は唯一無二の存在であるため、物語を読めば一目瞭然だ。

契約方法、出版した際の契約料など、どのようなシステムになつているかは社外秘だ。

「まあ、私くらいの設定能力が無ければ、所詮アイデアだけってことね」

「文章能力がなかつたのがとんでもないがっかりでふがね」

数時間後、再びチリンとドアのベルが鳴つた。

「ここにちはー、この前頼んでいたもの、出来てる?」

来店者は、若い男性だった。

「ここにちはでふ。あ、この前の資料でふね。少々こちらでお待ちくださいでふ」

カルチエがテーブルに案内し、男性を座らせると、アティカがいる事務所に向かつた。

「お姉ちゃん、この前お願いされてた物語の設定、取りに来ているでふよ?」

「ああ、アレね。その引き出しの中に入つてるわよ」

アティカが指差した先にある引き出しを見ると、「物語設定依頼分」と書かれている。

カルチエが引き出しを開けると、"スイートドリーム"という表紙の設定資料集が置いてある。

それを持って、カルチエは客の待つテーブルに向かつた。

「お待たせしましたでふ。こちらが設定完了の資料でふ」

若い男性は、待つてましたとばかりに設定資料に目を通した。ページをめくる手が徐々に早くなつていいく。

「おお、これなら次の展開が進みそうだ。ありがとう！」

「いえいえ、また話に詰まつたらいらつしゃつてくださいでふ

荷物をまとめるとい、満面の笑みを浮かべ、男性客は資料を持って

帰つていった。

それを見届けると、カルチエは事務所に戻つた。

「とりあえず、満足してもらえたみたいでふ」

「ああ、あの話つて、結構設定作りやすかつたわ」

”スイートドリーム”。現実で見る夢は、なんとも甘く切ないものだ。

夢を見ることは誰にでも出来る。だが、叶えることとなると、本人のただならぬ努力が必要だ。

そんな砂糖のように甘い夢に向かう、少女の物語。

「何で主人公が男性だったのかなあ、とか思つてね。少女にしてみたわけ」

「……主人公変えちゃダメでふよ

「いや、話が全然出来てなかつたみたいだから。ほら、少女つて夢見がちじゃない？」

「そんなもんでふか？」

当時は中年男性が主人公で、この歳になつて夢を追いかけよう、というテーマだつたらしいのだが、あまりに話が進まないので主人公を少女にし、中年男性はサブキャラクターにしたのだ。

その他、その少女の設定、中年男性の設定なども、主人公が少女のほうがやりやすかつた、とのことらしい。

「あんまり大きい設定いじっちゃうと、大変なことにならないでふか？」

「案外、それでもなかつたりするのよ。大元の設定を変えて、全体の流れは変わらなかつたり。逆に、大元の設定を変えることで、物語がスムーズになることだつてあるのよ」

「ふうん、そうなのでふか」

ちなみに、この”スイートドリーム”といつのは、先ほどの若い男性客が、物語の設定を”依頼”したものである。

もともとのアイデア、簡単な設定がある場合、そこに肉付けを行つて設定を完成させる、というサービスも行つてている。

自分で設定を行つてはいるものの、途中で話が進まなくなつてしまつた、という場合に利用している人が多い。

「お姉ちゃん、コーヒーでも飲まないでふか？」

仕事が一段落付き、事務所を訪れたカルチエが、淹れたてのコーヒーをアティカの前に差し出した。

「お、ありがとう～ ちょうど休憩しようと思つたところなのよね」淹れたてのコーヒーの香りが、部屋に充満する。アティカは、その香りを楽しみながら、カップに口をつけた。

「そういえば、お姉ちゃんに出来ない設定つてあるんでふか？」

ふと、カルチエは疑問を口にした。

今まで様々な設定をつくり、資料としてまとめてきたが、どんな物語にも完璧な設定を施しているように見えた。

では、アティカの作れない設定というものはあるのだろうか？

カルチエの質問に対し、しばらく考えた後、アティカは答えた。

「うーん、そうねえ、そういうあんたがいないとこに、こういうことがあつたわね」

今からおよそ、一ヶ月ほど前のことである。

カルチエが買い物に出かけ、アティカ一人で設定の作成を行つていたとき、一人の男性老人がやつてきた。

「あら、いらっしゃいませ。今日はどん様な用事で？」

「もうこの歳じゃから、せめて一つ何かを残したいと思つての……こんな小説を書こうと思っているところなのじやが……」

老人は、一枚のメモを渡した。箇条書きで、ある程度の設定が書かれている。

「それで……」これは物語の設定を作ってくれると聞いて、お伺いしたのじゃが……」

「物語設定のご依頼ですね では拝見させていただきます」

アティカは、そのメモに目を通した。

物語は単純で、一人の少年がいろんな経験を積み、成長していく姿を描いたもの、ということのようだ。

どうやら時代はかなり昔で、舞台となるのは近くに存在する集落のようだ。

「これらの設定を読んで、アティカは静かにメモを置いた。

「どうでしょ? どうにかうまく設定が出来そうじゃろうか? 「

「……これは、お客様自身で設定を考えたほうが良いのでしょうか? 」

ふと口にしたアティカの言葉に、客の老人はきょとんとした。

「そ、それは一体どういう……」

「この物語を作るに当たっては、私が設定できることは恐らく無いでしょう。お客様が思っていることを、素直に書いたほうが、私はすばらしい作品が出来ると思います」

そういうと、アティカはメモを老人に返した。

「そうですか……では、もう少し考えるとしましょう」

残念そうな顔をして、老人は店を後にした。

「どうして、そのお客様の依頼を受けなかつたでふか? 」

「そのメモ、どうやら自分の生涯のこと記録しているみたいだったのよ」

メモを見ている間に色々老人の話を聞いていたが、どうやら出来上がったら孫娘にプレゼントしたいとのこと。

そのメモには設定だけでなく、主人公の生い立ち、嬉しかったこと、後悔したこと、それに孫娘に伝えようとした言葉などが、箇条書きで書かれていたのだ。

「あのね、カルチエ。どんな人にも、絶対に設定できない物語つて

言うものがあるの」

アティカは、カルチエの淹れたコーヒーに口をつけて言った。

「人の人生。こればっかりは、勝手に物語の設定を作るわけには行かないのよね」

「そりや、人の人生を操作できればみんなハッピーな方向に持つていつたり、逆にくいアイツを不幸にすることもできまふからね」

「人生って、やっぱり先が分からないから面白いのよね。それに、過去の自分の人生は、自分しか知らない。自分のことを小説にするなら、自分しか知らない設定で書くしかないのよ」

人が生きてきた時間は、その人自身にしか分からないものだ。正確な自分自身を描こうとすればするほど、より自分にしか知らない情報が必要になつてくる。

そのような物語を、他の人が設定することは出来ない。

アティカは設定の天才であるが、他の人の物語まで設定することは出来なかつたのだ。

「あ、そういうえば、さつき面白いネタを思いついたんだけど」

「ん、どんなネタでふか？」

「ほら、私たちって、小説の設定を売つてるでしょ？それを小説にしたらどうかなつて」

「はあ？私たちの生活を、小説のネタにするのでふか？それはあまりに落書きに満ちた世界になりそうでふが」

「だから、ちょっと設定をいじつて、いきなり繁盛したり、店がピンチになつたり、つてことを設定すれば、いけるんじゃない？」

「全く、お姉ちゃんのフリーダムっぷりにはあきれるでふね」

しばらくして、「物語設定資料販売店」というタイトルの設定資料集が販売された。

程なくして、フリー・カスという男が約三十万円の契約料で購入したとか。

(後書き)

「幸運販売代行店」の一人の新しい職業。いや、副業といったところでしょうか。

やはり物語を進める上で、「設定」というものは結構重要なことがあります。

話が詰まるのは、やはり設定がうまくならないことも原因のひとつになると思うのですが、そんな「設定」が売っていたら便利だよなあ……ということで、構想は随分前からあったのです。後で「バクマン。」のアニメを見ていて、「ネームを勝手に作ってくれる装置があつたら……」という話があり、「あれ、かぶつてしまつた?」とか思いましたが。

ただ、途中のストーリーを考えたり、「この物語の設定」を考えたりするのがちょっと手間取つたりしたりしたのです。

ちょっと苦労したのが、作中に出でくる「物語」の「設定」。実はこれから書こうかなと思っていた設定をいくつか取り込んでいるのです。

「悪魔と少年の物語」なんかがそうなのです。いつか文章にしたいところです。

ところで……この物語の中で、「この話は使えそうだな」と思つたものがありましたら、遠慮なくその設定を使って話を作つてもらってかまいません。その際には、「メントをいだければ、読みに行きますので。

……とは言つたものの、あらすじだけではちょっと内容が想像できないかもしれません。

それは、私が頭の中できちんとだけ描いた設定ですので、後は「その設定を料理する人の腕次第」だと思うのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2278r/>

物語設定資料販売店

2011年2月27日02時40分発行